



源氏辨了抄

十二



九
樓
閣
庫



ていつめ一に釣殿作られつゝ一に舟共あり一浮
橋より一していつき日盛まゝ人に遠くおれは
よ十二日曜の日まてまのり結をねと釣殿とて合
すませまらん奥あらんらおまどおんと実
を結いて釣殿よお結ひね君らあまどまのり結よ
よかまの池子網わら一精とわら一て 聖跡と
らせま

西川よりまもつら 船らつれ川のいーがーやうの物

氷実れり定ぬまあて西川の網たよつゝ実とすん
西宮抄云禁河 野河右米門府檢知 以と夏供 聖
表

今業堤河へ東川也 葛野河へ西川也

亭子院沖集云一がーやうの池に前まて網とてま

つすうわ中 國中 ありあへる奥たえを結ひつ

船一勢人一靴子 躰小射入させつゝまねとそん

させておれいあま一人めして網せき勢結ひて奥
トてまのり

源順和名云 性伏沈在石間者也

いあめて いやゝあり水也

枕みよ云つみどくはつき盡申まいつるりわざ
とせんと廟の風をぬら一氷あまよととい

てもてさづく

公子調氷水 佳人雪藕絲 杜子美 納涼詩也

蟬のこゑきこむりくちりけきや也

花山院 六十 五代 中集子川虫の聲もよそぬ子蟬の羽

乃りこゑきこむりくちりけきや啼

あれえむとくまら今日のあつりさ 釣敵の水

清少納言枕草子云無徳なる垣干たつていふ

常の六条院の葦風自南東吹出微涼と云ふ

かこひまきりなる

こゝねむむと蟬とくちかたにぬもささの音の也

つよもるれくちんそくろくを 好忠集子

ろいりも獨離て死なれ友よとくろく我力る也

かかどりぞりよ

我宿とたのむ言聲よ思ひの同りよと云ふ

きまきつやしよ人もゆりちちを

催馬樂 呂 我家

我家の愧悵ともしはさくちを大君さませ

聲よせん門者よ何よげん飽きこころかせよえ

家と云字もゆり曲也愧悵の惟慢也大君の人と云

て云まり 和名集子石交明と書こころを皆

奥の名也延喜式子螺と云々志と云々（注）棠螺の

者（注）と云字とつと云む法（注）の左傳（注）子昔濟と云あり
子准（注）と云べし

細 昔（注）和琴（注）とも樂（注）あり

世一也近代大なる迄（注）と云

今（注）の内侍（注）の（注）神樂（注）の（注）か（注）の（注）用（注）あり

せと（注）諸樂器（注）と合（注）する（注）と樂奏（注）と云

毛詩十九有瞽篇曰作樂而合乎太祖（注）注曰樂記

曰王者治定制礼功成作樂合者大合諸樂而奏

之也周公ノ撰政六年ニ礼ヲ制シ樂ヲ作ラシタ太祖

相ト文王ニ告タルゾ

みんのつととめ守 花 和琴（注）の伊弉諾伊弉册（注）の

二神乃以代（注）より出（注）る（注）器（注）と云（注）日中（注）紀（注）あり

まゝ（注）を（注）ゆ（注）ず又天（注）岩（注）子天照（注）太神（注）統（注）たり

宴（注）より出（注）る（注）たり（注）なり寂初（注）なり六張（注）と双（注）て（注）弦

と打（注）る（注）なり（注）なり和琴（注）の作（注）なり（注）なり

今の世巫（注）の口（注）とせ（注）る（注）なり（注）なり（注）なり

より（注）起（注）る（注）なり（注）なり（注）なり（注）なり（注）なり

女官（注）の書司（注）と云和琴（注）の書司（注）の女官（注）あり

法花經提婆品曰 煉菓汲氷 松薪設食

法花經と云うるは、行基菩薩 薪を採りて、氷を汲りて、菓を煉りて、食を設けり。

これぞ一うごみて 孝侍

ほつまいとせしめられん人のよむにたゞもておひれ

芦垣のまがらひなりよ

人きねおさひやあまふし 芦垣のまがらひなりよ

ゆさびぶらりのとらへ

きふねおさひぶらりをとらへ 陸奥國 祭古曾園と誰りすかん

ふねおさひぶらりのとらへ

ふねおさひぶらりのとらへ 陸奥國

いよよふらりよ

いよよふらりよ 益田池乃根尊のいよよふらりよ

みなせり

あまきよとけらに海は氷 みなせり

いよよ 蜻蛉日記云石山よまつりてかへりよ

いよよ 山次の海をいよよと見えたり

田子のしづ波

田子のしづ波 後河原田子の浦波にぬきあはれ君とよひおぼ

あま川あり 大川のきよと川氷とつひくふらりよ

いよよ いよよのちのへり散るはなみよふらりよ

篝火 并五

三河河卷名源氏世に歳乃秋れ始のうき
せこが夜もうきうき 三河河也

^{六帖}初風の涼くあけぶらぐせこが夜のすそをぬぐき

^古我せこが夜のすそを吹くうきうき 秋のうき
右近のたり 右近將監の位より五位下叙

爵一にちゆへよたまといふたまの五位也

りまぞとわきをぬらさるるでくらり下りえたり
なるれ宿よりうきうき 秋のうき
あひやうきうき 秋のうき

寛平御記寛平二年平利世着皇王二世之孫桓
 皇孫之弟也而聲長蟬哥初誤秋虫之嘯葉間
 あいるきのついでよ

万
 よらひ酒をとり酒のこて酔るれすらよほよ
 んとけてるかきまよまよ

花
 司馬相れが琴をひきて卑文君がんとえーふ
 文君相れがひくひくたあもあもあも
 只んを乱しそをねと

野分 登并六

山河為卷、名、源氏二十歳歳の八月のゆき
 新夕露も世乃常るるがむとわいよまそ

植たてく君がとあゆ花をれむみえてもあは
 むりより秋よんとよまらへぬまきりうはと

樹下集

まいよ花をいられ舞へる錦とえら秋は
 春はむむのゆきよあふり物のかい秋をほき
 花もえらあまもあまもあまもあまもあまも
 川へーうりうま

喜秋よあはれてあまのあまのあまのあまのあまの

大いふ秋よとよせりど花んち時いられき
野い例の年より色ぬらうくさく

杜詩云八月秋高風怒號トガクスマ 天下安全トク

て十成ゆへ盛者必衰の天理もて大風ある也

まじりの落乃むの緒みざらし

古今好恒が長秋よ 玉の緒まけて ことらじ

穀みざれて 霜氷り

わりのづりの袖い秋のやまも

大なるわりのづり袖もさき咲花と風よらび

れと何のふれりたるく待えら風のかし

文城ミヤギ此れと何れは秋落とよりみ風と待とを

かむ橋 和名集よ米橋とや 古今物名よ

橋とあり

溪緑春の露いつめれあがれて白ふゆを橋

風をげよいふも吹あげつるき

史記項羽本紀云於是大風後西北起折木發屋

揚砂石窺冥晝暗

三条まると三条流と

九條右丞相遺誠記云凡非有病患日々必可謂

於親若有故障者早以消息可問夜來之寧括大

風疾雨雷鳴地震水火之變非常之時早訪親次
參朝

のりつ

殿瓦也

風飄碧瓦雨摧垣三餘詩八句。題殿宅。吳融

仁和五十八代光孝三年八月廿日自卯剋暮雨西剋北

風殊拔樹京中人家顛倒内膳司東捨皮屋倒

よ丑寅のりつり吹風は似り

のりつ

人の親乃らやいあゝ孫やまをさふりよほふい

をりんま

花文綾は花文あり綾也

謝惠連詩曰客從遠方來遺我鶴文綾とりよ同

しんく或説顯文綾也顯文沙るとりよ同

行幸 豎并ノ七

以_レ爲_レ卷ノ源氏世六歳ノ十二月より世七の二
月迄の事也

けききりの籠り

いふてつによかんや野山の人より川分を能く籠
るに人あつとせしめて下にきか物ききりの籠

大原野の行幸

花 野行幸ハ仁徳天皇_{十七}代より

始_レて定_レハ醍醐天皇_{六十}代 延長六年十二月五日

大原野の行幸ヲ摸_レして事也

うこにりきりこりめ

河 帝範曰_レ人主ノ之_射

如山岳^{ガク}高峻^{シニ}而不動^ズ

川のうらより外にめづるべし

昌泰^{六十代}元年^カ野行幸^也之時^カ車中之女^カ...

贍^ミ天顏^ラ或出^ハ半身^ラ或忘^ハ露^ラ面^ニ見^ル記^ス...

右大臣^カ昌泰元年^カ野行幸^ニ右大臣^カ菅原朝臣^カ...

臣^カ供奉^ス西宮^カ抄云^ニ衛府^カ...

川のうらよりとる法一カりの川よりいふ...

はめ...

昌泰元年^カ野行幸^ニ著^ス御赤白^カ椽^カ唐^カ凌^カ御衣^カ入^ル野^ニ...

之後^カ著^ス御衣^カ今^カ案^カ野^カの^カせ^カ...

上の^カ服^カ御直衣^カ子^カ改^カら^カ礼^カ一^カ例^カも^カあり^カ又^カ...

めまれしりも何と

亡^カ系^カ院^カより^カ酒^カ河^カ李^カ部^カ王^カ記^カ云^カ六^カ條^カ院^カ...

被^ル貞^カ酒^カ二^カ荷^カ炭^カ二^カ荷^カ火^カ炉^カ丁^カ具^カ...

此^カ物^カのみ^カ乃^カより^カと^カり^カせ^カ...

李^カ部^カ王^カ記^カ云^カ延^カ長^カ六^カ十^カ代^カ四^カ年^カ北^カ野^カ行^カ幸^カ其^カ日^カ...

物^カ忌^カ不^カ参^カ未^カ刻^カ上^カ還^カ船^カ置^カ...

くく人のたあつのがうとつういふ

延長四年^カ北^カ野^カ行^カ幸^カ時^カ藏^カ久^カ九^カ衛^カ門^カ尉^カ源^カ俊^カ...

次^カ使^カと^カ繼^カ一^カ枝^カ中^カ宮^カへ^カも^カせ^カ...

又苑人た垂つ耐とゆて六条院へまのせられ
うらき

大政大臣の明河野の行幸につりうまつり給へた

め 仁和帝 五十八 仁和二年 子荻河野へ行

幸に昭宣公大政大臣まで山伏あり也まはと為

て源氏もとて山伏あれりとの山をと誦教

せら河也

とーが山みゆきつめれる松原よ 川多河也

大原や小垣の山此小雲原もや木言われあ代の

うらき 打勢也 勢の打あざざり

やう也

打ちしきつて志すれ我家の園よ夢ぞ

あよき 朝日のゆんとてえ光の赤とより

河 大原あよき 物るえまのれ 河さえあき

うたあふー うたて也

れえておんとすれ女説ありにあり海はあき

世のすゑはゆりともれらたぐいと人のえまをいん

つきあーと 莊子天地篇曰壽則多辱

日へそおゆりゆきとまけくんと

父母まの目こまゆきゆりい智は也故りのゆき

不学三明倫云文王之為世子國君之朝於王季
 時三鷄初鳴而衣服至於寢內外問內豎內豎之
 御者藍曰今日安否何如內豎曰安文王乃
 喜及日中又至亦如之及莫又至亦如之其有不
 安即遇有則內豎以告文王文王色憂行不能正
 履王季復膳然後亦復初食上必在視寒暖之節
 食下問出膳命膳宰曰未有祭應曰諾然後退

三々めーぬのそり久さうく抱みえあうと

村多乃さうーワクぬと文よとさみもさうしあ

まぐりのすゑも約そりあくすむべきあをそり

從ぐるへいせられ

古文真宝一屈原漢又辭漢父曰聖人不凝滯於
 物而能與世推移世人皆濁何不泥其泥而揚其
 波衆人皆醉何不鋪其糟而飲其醕

まいーのり
 内侍司 尚侍二人 相當後
 三位

典侍一人 相當後
 四位 掌侍四人 相當後
 一位 女孀百

百寮訓要抄云尚侍ハ執柄の女多としよほむ女
 御更衣同程のり也近代ハ侍官もほむる人ま
 れ也

ろはとさうあうよ 史記云臣者君之羽

如^くい^を急^ぎ一^一刀^と顧^{くわ}ふ^い道^よ叶^やら^うが^海を
礼^れ法^とと^らぬ^い人^の由^由歎^たん^也

お^くり^けま^まら^れ 縁^えの^細三^{あり}あ^りあ^らか^け

上^上古^ま縁^えの^細わ^かき^もあ^り申^申古^古一^一首^よ

一^一お^る一^一で^い月^さら^とと^い侍^と守^けは^はら^らし^まる

訓^しら

み^みら^らめ^め おが^がと^と神^神代^代卷^卷上

唐^た衣^い又^又一^一衣^い唐^た衣^い入^入と^とく^くも^もう^う衣^いなり 注^注氏

唐^た衣^い君^きの^のつ^つら^られ^れ袂^たい^いる^るを^をう^うら^らつ^つの^の

き^きら^られ^れ一^一む^むら^らり^り唐^た衣^い入^入り^りて^てん^ん禮^れと^とお^おけ^けて お^お袋^袋卷^卷

い^い卷^まの^の唐^た衣^いの^の身^みと^とこ^こな^なら^らる^る事^{こと}と^と上^上句^くよ^よあり

下^下句^くの^の例^{れい}い

お^お夜^よの^のお^おす^すん^ん唐^た衣^いの^のと^とも^も振^ひら^らし^し ふ^ふの^のお^おけ

お^おし^し川^が玉^{たま}藻^も 裳^もよ^よと^とせ^せら^らり 後^後撰^{せん}十^十女^に新^{しん}一^一

志^し賀^がの^の唐^た衣^いの^の身^みと^とこ^こな^なら^らる^る事^{こと}と^と上^上句^くよ^よあり

お^おら^らし^しよ^よ侍^しめ^めり 大^{だい}侍^しの^の身^みと^とこ^こな^なら^らる^る事^{こと}と^と上^上句^くよ^よあり

か^かの^のみ^みら^らし^しと^とつ^つび^びせ^せり^りひ^ひは^はし^しあ^あき^きら^らし^しと^と上^上句^くよ^よあり

と^とし^し車^{くるま}の^の身^みと^とこ^こな^なら^らる^る事^{こと}と^と上^上句^くよ^よあり

お^お申^まつ^つけ^けて^てみ^みら^らし^しと^とつ^つび^びせ^せら^らり 大^{だい}侍^しの^の身^みと^とこ^こな^なら^らる^る事^{こと}と^と上^上句^くよ^よあり

お^おせん^{せん}よ^よ一^一の^のみ^みら^らし^しと^とつ^つび^びせ^せら^らり 大^{だい}侍^しの^の身^みと^とこ^こな^なら^らる^る事^{こと}と^と上^上句^くよ^よあり

かの山屋を復しんかやーあしせりり

管巻子内府の愛とあらせりる相人の烟云り

年比山々をえられ給えぬゆふと人の物よあり

まーのーあつるやと穿しりり

かゝり嚴とも法智よるーあしへき

神代卷上廿一枚曰天照太神振起り彌急握劔

柄踊堅庭而陷股若沫雪以暨散

俱穢歎邏々箇頃とけりり寸は庭と嚴と

つひくして堅きりり用り

素盞鳴尊の聖りと天照太神の怒りり時よ

まのつがとーあひて勢とるーあし時のり

庭とま岩のーあひて勢とるーあし天照太

神と素盞鳴尊とーあひて勢とるーあし

将も兄才るれば近江君の腹とるーあし

てりり也

夢よ富ーりり

山谷一注曰按異聞

集道者呂翁經邯鄲也道士郷会中有少年廬

生自歎其貧困言訖思寐時主人方炊黄粱為饌

翁乃探懷中枕以授生枕两端有竅生夢中自竅

入其家見其身富貴五十年老病而卒欠伸而惜

顧リカクニ呂翁在リカクニ傍主人炊セウク黄梁尚未シヤク熟マ 呂翁リウウヲ唐ノ

徳トク神代卷

世セ上ノの評判也

もや卒ソウおまむ久クに好キい一ヒトのわくまづりものよ

志シ好キおまむ久クに好キい一ヒトのわくまづりものよ

まきまきとつり好キも知チる恥チ也位イもさ

あまかゆぬ子コ古コ久ク何ナニの世セのまらひ也人のとく也

史記本紀一曰イハレ竟ケイ知チ子丹朱シヤウ不フ肖シヤウ注ツ肖シヤウ似也言不

知チ人生丹朱シヤウ又有アリ廢ヘイ子九人皆不肖也

蘭 並并八

以イ方ホウ并ヘイ詞ジ為ニ卷マク名ナ但タ詞ジまらまの花とあり源氏

世七の八月九月乃ノ中ナカあり三月より七月まで

おヶ月のち物語もあけりよ肉ニク信シ信シ成ナリら

とんじり又マタ大オホ文フミ之ノ月ツキ廿ニ日ニより世セ好キよ又マタ夕ユフ管カン

宰相シヤウよるれらりどとあり

えいまた 服ウケ着キの卷マク櫻ウヅすゝ冠カウの飾カズと除ノゾん

也ヤ櫻ウヅの端ハタともの方カタへ法ホウとよ也

らよ 四シ季キよ字ジらり春ハル蘭ラン夏ナツ蕙ヱ秋アキ芝シ又マタ其キ

いらんまぶさゆいあり 蘭ラン兄ケイ蕙ヱ弟テイと別ワケれ兄ケイ

才のりよひのりせり

かみ時乃落やつり敬袴表いけよかどづりも女音

一二句のり夕音もむろつも大家の縁よどし敬

と美路よどし落よやけりい夜のやつ道とて

我のいいと表いけよといつて也むろつし源氏の

ゆ子成路よきい兄弟のいよそ敬袴とて人

不審抄出

みらのりてあり

あき東海のりれり常法帯れかどづりも何ん

ぬれりよろけきのい乃落さぶうす景やかどむ如後

不審抄出云兄弟なるれれ実よい兄兄

けき好人とまきまゆりのいこも同い

まれい落案とらうかといゆりと較むへきたり

のり也わらまのい

後撰武蔵野の神いりりかむ景いりりい

今い

後撰俺ぬれ今了同難波るみ成つてもありん

女いよよさうよりのよとあられ

礼記郊特牲曰婦人後入者幼後父兄嫁後夫と死

後子注云謂順其教令

花
儀礼曰婦人有三後之義無專用之道故未嫁後
父既嫁後夫死後子故父者子天也夫者妻之
天也

不審抄出云あるれどそい玉鬘の源氏の子より後
へ三後の理い句論されど実い内大臣の御子なれば
次第とたぐて我々悔いすすまじき事也

あひがまや 花 物のこれきすれら

花 吉野の瀧とせうんよりもりて

人の心えせしま

花 母とて吉野の龍いせむせ人の心い

いつの後よりれて 花 引寄河汁也

花 なるれどなむとてさる月桂乃けよ

妹背山よりると為すて 花 緒絶橋よ

妹背山と和 花 緒絶橋い陸奥也

背乃山よにむら 花 妹の山言評も打橋

陸奥のよたんの橋や 花 是るんかみ

名承二と一 花 肩より削古今

撰津國のよい 花 山城のよい

いりせの兄弟と 花 緒絶橋よ

慈子とせしる計也。一萬葉子妹兄と書きより
 先帝のゆとすう欽宗碩云。伊弉諾伊弉册の
 先帝も又史婦あり。ゆらゆらありと云
 但神代卷とん進の天然と陰陽の二神化せし
 流しとあれは兄弟とん定ぐ。史婦とん成流り
 日本記子妹兄とす。いづれとせうと也
 後撰十七難云。云々の中よひひるるの
 ありらん常るれ海よんしゆされ
 じつし妹兄乃山の中よん濁る雲の晴すもあつ
 りらん。これも先帝の字と夫婦よ困らあり

詩經十一黃鳥篇鄭玄曰以陰礼教親而不至
 兄弟之不固云君臣ノ間ノ陽礼ト云父子兄弟
 夫婦ノ間ノ礼ハ陰礼ト云周礼二十二ノ教ヘアル其三日
 以陰礼教民不怨云。寔ニ兄弟ト云ハ夫婦ヲ云
 夫婦ヲ連ル事カ堅固ニナク夫ニ捨ラレタ婦ガ周ノ
 宣王ノ教ヘガ世界ヘ行トバカスト怨ル也男女ヲ親
 義ヲ教ヘラレドモ至リトバカスト也
 うらみおのゝゆらん也 長居也
 河 位高と海に告ともも指す人忘るる可なり之
 大拍ひ中拍ひ同。右のすげられん帯よふひんつ

大将 中將 也

くらがの物流云右大將藤原兼昌あて言といんと
 かなせ文可くくふに中將也と親まふし給ふを
 阿て宮子守り給ふべき事とかなすまはる給後の
 中將けつづきの中將也なり中將けつづき
 給ひてそのよりあたま物一給ひてあまびきと
 新よき今兼賢黒大將柏木中將も昔より右の
 かない君 阿大君也嫡女のくく又長大の義歎
 兼平朝臣女と同院大君同院今君と集りもあり
 かなよ 阿姫老く也流少御言が枕双紙すま海

き物志守の月粒かなよのけき

むきの紫乃おと 日けのね乃おと

と流ぬやうに一給く

表 玉篠の葉にいとけつ白流の今く世へん我く

つひえぞ打あひらや 宮夜新道之篠葉の

おとかなもてまらう使のくくせの風流

まらう宮のすれんと符合

忘らんこよも物のあきとく海もてく海もせん

表 忘れよあきとく海もてく海もせん

ふりてひらよむよあひ 傾心向日葵 文集

もろくもやうらむとほも悔ひり給ひさる
也又義んらりけりともむ装よらり
人このゆらん人とも顔馬のともや
家若りの中おまのやうにあらてん
也む装の顔馬よさるゆらん也顔馬の
お方のゆらん家まらん

人きやういふ一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

ま

何とて男のころも老ぬらん年は
むろい大なりそ

人の腹ふり時あきとも又腹

ころりかんととと

古語拾遺曰日本武尊東夷征伐の時相模國よ

て賊徒燎原を討つ時尊孝薙劔をてるよと

ころり給ひ一ふ火煙賊徒の方へ吹くを逃

ところり一と向火付るとよ

兼も交ぬりやとそこの一給よ

け 何れいふでゆん白雲の海り行のよも交ひ

神のころりもとけらん

け ころり給ひつゝおろかぬれぬれ神の秋のけはまあ
火より 香爐の火より

抱くへあめりひそめどとておきせしむ抱く
もも木瓜のやうに花いせ

籠のちさまりつる火より

焼抱乃籠の下火さよふれ独とさます人やは

びり抱くよりまごとんらあせ

恒玄物後子嫡女と父い息子とひりど継母のひ

きりによりとらりまよりし

わくろくまてそへりもほひらり 拾遺六別部

君り恒宿の猶乃ゆくしやわくろくまよひりし

何 文選曰顧喬木於古里

別賦

師

文選六十卷梁昭明太子撰ゴコレハ梁武帝子

也周ノ末ヨリ六朝ニテノ詩文ヲ集タリ菅家

ノ点ヲ用ユ

かたりまてと自よはり

姉妹兄弟皆列長恨歌

は紫の一りゆへは武苑野のまいみなりと衣とぞふ

とのれあうし路へる 川舟細針也

転たとをまをまを寄はる人の我とあつせらるるよと籠

あやぞうれりのせらる 師世とのとへせよしら

人ありて抱氣と数年燃焼よと父母の川らうら

續正太持の乃も又式アつまのたぬも外安事然

とらり〜と

おやけ人となのむらり人いさくやいあり

大藏卿重家 有家ノ父也 女尚侍在久保豊成室。尚

侍淑子 中御言 長良女 在久保氏宗室

年取りてまつせまり給ふ

西宮云尚侍新任之後詣縫殿陣令奏慶賀之由

内侍一人出来傳奏 書讀一人相給 給禄 女裝一襲 入講繪箱

中宮御内者付内侍令啓慶賀 有贈物

〜の〜らら〜び〜と縫殿陣まであり

て内侍一人出立て〜と奏聞〜ぬれ女房

襲来と給りて還らるの〜也今お装い内

ず〜一給ふべき〜と兼香殿の東か〜と

局と守

〜と叶えぬせらぶ

芥橋一音の人もろが〜とわらふの〜と

つこのゆき〜 直廬 直廬 直 直

廬舎也 近衛府ノ曹司也

〜と給ふ

百子も轉喜の物〜とめられたまれば我がかりゆ

〜と〜と〜と〜と〜と お装の慶賀三

位を叙せしむる也

万葉集の序の事 権市の八十のらまゝいほひのり

紫の八入深しう夜乃花池は灰守ののり

ひりのまにづがためし

後撰十一は入納言國経朝臣の家はゆり

りて思ひて平定文がわらひゆてゆくまきて

ゆりはけ女をに贈た政大臣はむら

りゆりされい又たよそかよつとこなく

されいかのとんまのふれむづりなるり

對子あまびりぬらうとらびよせて母をん

とそかしまよす付ゆり 平定文

昔せらうが言の出さるる契り

あみ人志す

うらにて誰契らん定むる善治は

好とらう

去乃野に莖摘とらう

ふりやう

古 後磨の海士乃ゆや

うらう

万十五 入るれまにたる

雪のまきく山吹うらうらも君がよあれぬ花らうや

りやくうら

尚書 恭

日本紀 礼

種うらひ ぬも種海ら也

君すまで種のうち庭の庭まほするをれまどせも

玉水のこがうやうよ

河 ぬやまぬのぬ水敷きもきあふぬら

玉藻まうりそとこし

上野 風信上野詩曰

驚たりへ鬼え来居らぬ乃池のや玉藻へ突る

河 ぬそあひもすが種やも種まうら

宗祇云政事要略衛門府に風信のすあり

弄

後漢書列傳二十一杜詩傳曰階下尤兵十有三

年將師和睦士卒息藻注言歡悅如鬼戲水藻云

杜詩字公君河内汲人也建武元年歲中三遷

為侍御史

ありもう種ひきうら

万 拾遺

ちてあひぬかぞふよれもよがほもこれひやうすうら

ぬよ衣とあどの種ひて

衣

ぬかのぬよ衣と海よりうらぐらよ物とをえ

いんそをあう山吹の花

弄 後漢

ぬよ衣とあひぬ山吹のぬよ衣とあひぬ

河津松

あざねまゝのひもやれつまこと獨やその山吹の花
玉袋巻きぬぐりよ豊くく阿るき山吹の花乃
りそあがとけいしきうまとあり又野の羽乃羽
がくと山吹の咲乱る盛よ露るれる夕暮に夕暮
の啼泣へりけあまも山吹よこくこり

かたよふんえつ

人見集

夕暮の野へよ啼てよふきれがにほつと高しほふ
かりの子れ 鴨の子とわらわめせわらわの子せり
あしとるるといふ秀也

芦根もようきぬすごるあはれ親よ海らと実たのし

うすの物

あひぢらよあせこめはかりるよの君が宿まてあつとるん
女いぬしの親のぬあさりあも

毛詩曰女子有行遠父母兄弟

たきーしゆねにり

かりにこご柳りしゆねにり甲一人も意とらるま

梅枝

上詞為卷名源氏三十九歳正二月の事也

ゆりきの事

裳もも袴はかまの事ことよりゆうへへ裳ももたたり

うかの御供みけな原君はらぎみの女むすめあり宮みや十二歳にじふにさいより裳もも

着きありしと例れいとして咽ね石いしの御君みぎみ十二歳にじふにさいより

也

去こも同どう二月ふたつきよりううりの事こと

今年十三歳也冷泉院帝れいぜんいんてい六十むそ元服げんぷく應和おうわ村むら

三年二月廿八日十四歳の時也是と例れいとして事こと

ゆゆ下詞したごより二月廿余日の程とあり

八条式部卿の

花

八條式部卿本康親王の仁

明^{五十四代}

天皇の弟五井御子母の後に位上滋野

温子参議貞主の女也

花の枝のいづれと云はる人のとがめんづつめ也

梅花香と吹くは春風よんとそめづんやとがめん

うとにんへ

河 白氏文集曰外人不見々應笑

と終りんせん

河 君より誰よりんせん梅花色も香もさる人なり

のさあせ

山谷は聞香しあり世俗は香とさ

くとしの観る也

公忠洞臣

河 号滋野井辨右大辨後中位下天曆

六十二代
村工ノ年号

二年十月廿八日卒光孝天皇^{五十八代}御孫

大彦御國記子高名蕙物公好子也

梅が枝が

催馬柴 呂

一花 梅の枝よきわら嘗やまけりてくれ

二花 まけりてまけりてまけりてまけりて

三花 ありれりてまけりてまけりて

梅の枝よきわら嘗まけりてまけりて

あせもへぬ

今
いつまぐの髪よふのあはれん花ぢりすいあせも
花の香とえさぬ神子ふりしり

不審抄出云えさぬ神とふ前の御よみづくの
いさうたにる御の御さふい一らざりふあれは
あはれものともつとけつらあつ也

花の香は流りし焼物也

みくらあけの内侍

髪をすくうに
結髪為髪
非代巻上

可
裳着の時先髪とあけらるる金釦すうは内侍
そ俊とつとめり也
釦 金華飾也

た大に敵のと乃君まつり流しぬまのけの敵と安由

不審抄出云宿本卷よ今上の女二宮の御母
壺の女流まご東家の御時よりあつ流しあり
け麗景敵とらるるき流かきとふのなまごら
いろうりも年経へばなれぬあまもや

かんなのこころん
河云
いらはにほへどらりぬる

と 大安寺護命僧正作
大師 東傳教
作 加之
わがよたれがヨリ
あひもせず
法 弘

今たの世乃能名い弘法大師始めて作之
名い日中紀万葉の奇事乃本極のこくは日中
紀乃能名い音より書之万葉集い音と訓と義

とせめてきく

故入の交の由といひきりてあつうあまめはら
筋ありーいどまはれおありそあひどすく
ありー

物終法人の行通ふら留日用の教ありと
いふよりーいはい物くすとりうけ何肝文
字とらうーくよふよふてく時いふらま
やつーくーいよあづうさやーきすう
そなるもの也思うーくとけらますいみ
めらら人の心まよふ

阿まりそびれてくせがきい

生れ付器用まで筆きくころあーうう海は放
捨ちるとはと人のーいころ

あいで筆繪

假名字の中と帯の葉乃繪

とすう也水石鳥などともく也中筆
條の葉事といふも文字の條なぐる留條の葉
なりつー

筆まげ拾つ

班題投筆硯歎曰大丈夫當立功名異域以取封
侯安能久事筆硯間乎

今業等とまぐりし詞の如く、
班超の氣志大なり、
老母と養ひて、
嘖嘖寸草如と、
母よつゝ子と
歎けり

ふらりどろりよ
不念不調 遊仙 嘔
泣き泣く

つらき

ふらりどろりよ
つらき

万葉集 二十卷あり 四千三百十五首ノ内

長哥二百五十首也

詞林採要抄云四十三代元明天皇和銅三年庚

戌春二月後藤原宮遷平城都至四十九代元仁

天皇七代也其中四十五代聖武四十六代孝謙之

兩代別而号平城朝國史風土記等明也万葉始

聖武之朝至孝謙天皇天平勝宝五年撰之也諸

兄公薨之後哥多家持撰之也諸兄公者孝謙九

年天平宝字元年正月六日薨大伴家持五十一代

桓武天皇延暦二年任後三位中納言同五年十

月五日薨

棟本丸四十五代聖武即位ノ神龜元年六月
十八日薨コノ故ニ撰者ニアラス

私考續日本紀三十八卷曰延曆三年八月庚寅
中納言後三位大伴宿禰家持死

卷之八の筋と云つ 王裁之が争ひも

經の神あり行成卿の十二の攝と云り

掌中曆云高名能書嘆哉天皇弘法大師敏行

兼明道風木二頭佐理大貳

後中書王 具平行成侍後大納言

切灯臺のゆき

切灯臺のゆき

切灯臺のゆき

たふささるる記

ありぬやと心みそるまみひにささるる記

位あきく何となき方の指打とけんのまゝるる振舞

あざめのせうろれんどのつらとらぬささひさ

むべきくさつひる記

けは源氏の力れよまそひ知て夕音意見

源へり好きのひまやまりゆゑん大くさあき時

るれはたゆまつーむべきと源氏一部は

一言とめて結する是

寛平遺誠曰尤大将藤原朝臣 尤大后時者功后

之後其年雖少已熟政理先年於女事有失

女のゆびをんか一人のむくもみざらしたため

あり 河 世継云天曆帝 六十二代 村上聖主 安子中宮

藤原安子右大臣 藤原女 世治ひて水欵を清くぬ中

式部卿宮の女房とぬつて世治ひて世の政も志

らせ治めぬ海を治り今今のそつとづさよけ

ぬりよそそまらちよ小野宮のわくくあどあそ

れ世のたりにしきるのいんのみ乃世ま

うらむれりのせきり人のそつとつひ行か

つらり 皇 代乃たれらる帝も好きよん乱治よ

たより此事也

つね乃がごとく成らる 皇 云桑文とあは源氏

のさひんららと 皇 皇とまりてれこら一 皇 龍月夜

乃ゆよそへ頃廢のた遷とるまら 皇 曆前のゆよ

ゆり人の戒とせんぬの

うへつ 皇 運なくかかともつひせ

河 芦根よりれり人そつれあけ世むいえきすすあ

たがぬこととつりや

皇 偽とよみ拘り今更子にがぬこととつりされん

藤裏葉

以詞為卷名源氏世九載の三月より十月まで
のゆかり

関守のうらも祢ねんま

人志れぬらう^が通^りの関守^のい^はひく^もの^うら^も祢^ねん^ま
い^はり^の志^{あり}

み^こり^の此^の神^の海^のし^らぬ^りの^しら^ぬり^の志^{あり}
三月廿日大敵の太宮乃志^の日^{より}極樂寺^にゆ^き下^り
行^くり
三月廿日よりせ^はひ^のし^らぬ^りの^しら^ぬり^の志^{あり}
十日とわ^かず^ても^の日^はな^らぬ^れば^の除^服也^の日^は吉^日

とろくひて内禩ニすりゆハまのびハりもあり八
月十九日百ハ十日ハあハるハれハ菊ハ巻ハ子ハ八月十
三日ハ除服ハとあハるハ百ハ十日ハのハちハをハがハりハあハけ
て吉日ハ除服ハとあハるハ又ハ重服ハ父母ハハハ十三ハ日ハめハの
忌日ハとてハもハれハそのハ月ハハハ服ハ月ハ之ハ人ハハハ正月ハ廿ハ日
よりハせハしハのハ来ハ年ハ正月ハ廿ハ日ハハハ周ハ忌ハとてハもハれハ正月
のハちハハハ服ハとあハるハ也

御寧令曰服一年謂以十三日為除不計閏月其
五月以下並皆計日
李邦王記美乎六十一二年三月廿七日皇太后

光
代朱雀

於極樂寺為光考太政大臣及先妣人親王代

追福修法會

今業極樂寺取宣公建立之在深草

極樂寺ハ横家の墓所也古今十六云堀川太政

大臣乃由りりハ深草ハのハ山ハハハあハてハけ

不ハほハりハとハけハり

空ハ想ハのハ心ハとハんハつハもハあハらハつハ深草ハのハ山ハハハあハてハけ

なハりハあハりハあハらハつ

於送 爰ハにハあハりハあハらハつハれハあハらハつハるハもハあハらハつハるハ

文籍ハにハあハらハつハるハ一ハ禪ハ云ハあハらハつハるハ

佛於勝延

二五
てふこやまたきつたきついでいと親に申さる
きついで

三
とらけりけりけり家のしほ親に申さる
きついで

四
天地の祢と祢と後——はとれいぬうよう
ぬうよう

五
すらの根乃すがるまうまきまきととれいぬう
いきくい

六
越音と訓とよまへりぬひこすい負て越るぬう
よこきき——もい申けり——もとよま文字と

流て流也。とらけりとい家の零落たるは源氏
藤裏葉巻よけ詞禁句なれば内文は勢と加へて
年経よけりけ家と流流へりぬい家ある男子の
女とつれて垣と負——にらを親の知らぬし婦
を許ららんといりて下いし婦が陳しる
詞也天地の祢と祢と後——はとれいぬうよう
ぬうよう

けりけりも
いぬい
ぬうよう

宮御らしむのたらしめてあまのくしはの
是いかにくくしれとよふ是もや
をのそらしつべきと夕音何

松よ契まするいあぶるる花

世のたけしにも成ぬべしつら

河のたけしにも成ぬべしつら

世のたけしにも成ぬべしつら

河のたけしにも成ぬべしつら

世のたけしにも成ぬべしつら

世のたけしにも成ぬべしつら

川口園の浮現國也

川口の園乃其垣よりれれ出てよれ秘ぬ

此とく謹物とせり芦垣是垣

秘がれ乃垣が

秘がれの垣がの花杖旁に

けきい花とつり今人のりか

くしん佛 國史曰美和 七年四月八日

師傳燈大法師位静安於清涼殿始行灌佛事

公事根源抄云此佛生會に推古天皇

すの釈迦如來の優毘藍城とせせれ

新下て水とくにて釈きよひせまりーのど
也

遵生八牋第三引玄樞經曰二月初八日乃佛生
日也周建子以子月為歲首是以十一月為正月
也莊王九年四月初八日釈迦生以子至卯月是
今二月也

この我の佛の生れ行ふの卯月と今この二月也
十一月子の月と正月とて今の世乃二月が
月也と云り

師云
翻譯名義集曰浴佛經云一切佛皆四月八日生

也
薩婆多云二月八日生
蓋西域以寅月
十六為歲首以寅月十五為歲終
三寶紀定四月為二月故北山云周二月今十二
月也而大聖在乎周年故得以十一月言正考二
月但槃屬十二月此盡義矣其定誕生亦十二月
未盡善也二教論云周以十一月為正春秋四月
即夏之二月也依天竺用正与夏同僧史略云江
表以今四月八日為佛生日者依瑞應經也今北
地尚瞻八浴佛乃屬成道之節故周書異記云周
穆王二年癸未二月八日佛年三十成道正當今

之騰八也漢書云西域建寅為歲首二月則當建
 卯四月乃屬建巳况涅槃瑞應翻傳到此適當漢
 魏之後皆遵夏曆所以天下相傳以卯月為涅槃
 以巳月為降生者殊有由也諸文所載年月日異
 故附此集示後世これ今の世より四月八日
 生日の禮也

多毛のしんやい 水渡不通より河あり

けりあはくあはくかき成はん水のききせちきりしゆと
 けりあはく人乃中あはくはく人よそあはくはくのか
 あり 世と盛衰の理とより 葵と十分三歳勢
 あり

いりあはくしんやいそのあはくよそあはくはくはくはく
 お中あはく母あはくあはく世よあはくはくはくはくはく
 息女は秋好中あはくあはく世界のあはくあはくあはく
 あはくあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはく

かきとかりしん 古註蒙求曰晋郗詵字廣
 基子元賢良對策為天下第一文帝問卿才如何詵
 曰猶桂林一枝崑山片玉帝笑之今試場折桂始
 於此也

菅家乃初冠のあはく母乃よそあはくはく
 久世の月は桂もあはくあはくあはくあはくあはくあはくあはく

いよつとそと見えたりは

後撰 娘きとふれもいひつらそまらねぬのい洞こり

浅緑つう紫の菊と落まると濃紫のふさけきタテマツ

申細言の相当後三位されい浅紫也深紫ハ一位

つらと衣服令よあり但細言ハ大極を以て

よむり常侍事也後撰十女子ゆり 鹿明朝中細

言子成侍たり耐人のさぬつらとと

九條石太 心いよと君や夜とぬぎうてい此紫乃ととまん

五 鹿明朝キカ 天曆五年正月権中細言後三位初叙三位時兼大臣袍流例也

いしへを繋せたりみ打ぶき死立ぬ一 天の羽衣

これ三位の袍と一位のやうに詠せし例也

二葉より名をい菊の菊もれば浅き色とく落もあつた

後撰 落がれもるらる者の菊もれば花の何れやくたか

ちいさ本どもをりしもいしふき浅しなり

河 白氏文集曰 賢糸千万白 池草八九緑

ゴ 童稚盡成人 菌林半喬木

一しう薄もふし返りせて

河 君植一 一村傳書の新説はき野色に成りたり

神皇月の廿余日の程子云糸院子行幸あり

花 康保二年十月廿三日村上天皇の朱雀院子行幸

ありし例をうけてなり也

紫の雲より菊の花より多に世の早とそんり 大ぬを

慶雲壽皇の心状南仲記曰鷹紫雲之瑞生 ガクニシガクニ

也 也

帝王世記曰孝帝生時紫雲覆於殿上此帝時雖 シテ

遭九年之洪水民誇不菜食 ホソチスサイセ

一禪云壽皇とバ徳皇ともいふ代明時の赤瑞也

紫の雲と菊の花より世より菊の早より似これバ

もつゝぬ世の早とあり又紫の雲と禁中では

ふらぬりあり 弄花

河

久方世のよきから菊の花は早とそめられ

河をありとれと

秋と立て河をありとれ菊の花よりつゝに 平貞文

もつゝつらむと 至徳記云椽ト云木也

椽のまぬき人いふかといひ河よりききむく 万

角髪也舞童の竹也 髪 神代卷上



